

日本語の意味的関連性を利用した小学生の英語語彙学習 —教科書分析と教材開発に基づく実践研究—

佐藤彩香(岩手県奥州市立水沢小学校 教諭)

1. 研究の背景と目的

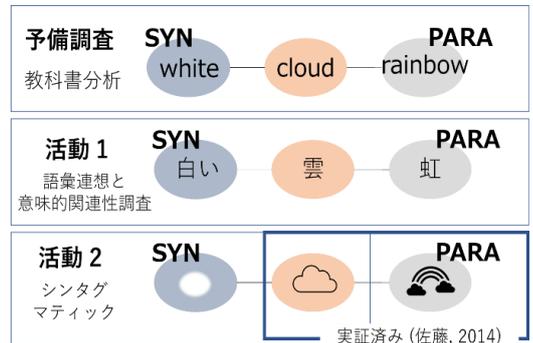
様々な変遷を経て実施されてきた小学校での外国語教育において、現在課題となることが2点あると考える。1点目は教科化に伴う語彙数の増加、2点目は教科書で扱われている語彙が名詞中心で偏りがあるということだ。語彙知識はコミュニケーション能力を支える基盤となるものであり、外国語学習の初期段階にどれだけ多く、児童に理解できる形で語彙に触れさせることができるかが習得の鍵となる。更に、児童が自然な形で様々な品詞に出会い慣れ親しむことが、文構造への気付きや理解にも繋がる(卯城, 2018)。先行研究において、初期の学習者は母語の知識を生かして外国語を学ぶことが示されており(アレン玉井, 2010)、母語の語彙知識の一つである単語同士の意味的関連性を利用することで効果的に語彙を学ぶことができることも明らかになっている(佐藤, 2014)。

そこで本研究では、現在の課題に対応するため、単語同士の意味的関連性に焦点を当て、それを取り入れた語彙学習教材としての絵本を作成する。そして絵本教材を用いた語彙学習の実践を行い、児童が新出語の意味を学習できるかを検証する。様々な語彙を効果的に学ぶための語彙学習教材を考案することが、本研究の目指すところである。

2. 研究方法

本研究は大きく分けて3つの調査・活動で構成している。

- ① 予備調査：教科書の語彙分析を行う(品詞、難易度、使用頻度)。分析結果をもとに、語彙学習において児童が学ぶ目標語も選定した。
- ② 活動1：自由語彙連想課題と意味的関連性判定課題の実施。児童の母語である日本語でどのような連想をする傾向があるのかを調査し(自由語彙連想課題)、どのような単語同士が意味的に強く結びついているのかを調べた(意味的関連性判定課題)。先行研究に基づき、意味的関連性のうち、統語的な結びつきであるシンタグマティックな関連性(SYN)と上位・下位語などの範疇を表すパラディグマティックな関連性(PARA)に焦点を当てる。
- ③ 活動2：意味的関連性を利用した語彙学習教材の作成と語彙学習の実施。教科書での学びを補強する15分程度の絵本を用いた語彙学習を実施。3年生は週1回×15分、6年生は週2回×15分の計画で実施した。学習後には英語の音声聞いて意味を答えるテストを行い、理解度を確かめた。



3. 結果・成果

■ 活動1から

活動に使用した語彙の特性や実施上の条件等が影響し、パラディグマティックな関連性にある単語同士が日本語では強く結びついているという結果を示した。しかし、統計的に有意な差ではないことから、先行研究で示されているように、母語においてはシンタグマティックとパラディグマティックな関連性にある単語同士は、同程度に強く結びついた形で心内に保持されている可能性が高い。

■ 活動2から

活動1の結果をもとに、それぞれの意味的関連性を取り入れた絵本を使って学習を行ったところ、どちらも同程度に高い正答率を得た。児童に対してどのように意味を考えたかを問う自由記述式のアンケートから、少数ではあるが意味的関連性を効果的に用いて学習できたことが分かる解答が見られた。一般的に絵本を用いる場合、語彙は付随的に学ぶものである。しかし、絵本に意味的関連性を取り入れ、そこに自然に関心が向くような意図的な働きかけや工夫があることで、児童は思考しながら様々な語彙を学ぶことができると考えられる。

4. 今後の課題

意味的関連性を効果的に活用できた児童は少数であったため、どのような要因があったのか更なる検証が求められる。絵本教材を作成する際には、より目標語の特性を考慮した選定や絵本における物語の構造による影響を考慮し、統制する必要がある。また、今回はコロナ禍という制約もあり協力者の確保が難しい場合があったことも課題であったため、今後更に対象者を増やしての検証も必要である。

共同研究者：田中菜探(日本大学経済学部 専任講師)